



Title	宮本匡章先生との思い出
Author(s)	山本, 達司
Citation	大阪大学経済学. 2026, 76(1), p. 50-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105020
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



宮本匡章先生との思い出

2026年1月28日、宮本匡章先生は亡くなられました。92歳でした。先生は晩年、金沢市内のマンションに奥様と二人で住まわれていた。私が先生と最後にお会いしたのは、1年前の2025年2月、私が金沢出張の折に先生宅を訪問し、1時間ほどお話しした。

先生はその時、自分が癌であることを推察されていたが、治療する意思はないとおっしゃっていた。というのは、発見が難しい癌であるため、診断のためには造影剤の投与が必要であり、それが身体に大きな負担を与えるからであった。先生は、まだ自力で歩け、テレビを見たり、小説を読んだりしているが、病院以外には外出していないとおっしゃっていた。最後に私が先生宅を去る際、先生は普段通り私に挨拶され、私も普段通り挨拶を返した。でも二人には、これが最後の挨拶となることはわかっていた。

先生宅を訪問した際、先生は人生を振り返って多くを語られていた。そして最後に、「いい人生だった」とおっしゃっていた。先生の「いい人生」を振り返りたい。先生は1933年3月27日生まれで、1955年、滋賀大学経済学部卒業、1957年、神戸大学大学院経営学研究科修士課程修了、同年、大阪府立大学経済学部助手、1961年、講師となられている。1964年、大阪大学経済学部講師、1965年、助教授、1969年、経済学博士、1972年、教授となられている。そして1987年から1989年まで、経済学部長の重責を担われた。それと時期は重なるが、1986年から1990年まで公認会計士試験委員を務められている。1992年、大阪大学名誉教授、同年、高岡短期大学学長に就任され、1994年には日本原価計算研究学会会長に選ばれている。1998年、金沢学院大学経営情報学部教授、2000年、学長、2004年、学園長に就任されている。そして長年の功績が認められ、2010年秋、瑞宝中綬章が授与されている。

先生の研究の専門分野は、会計学の中でも原価計算・管理会計であり、製造業において「経営管理に有用な会計情報をどのように作成するか」、「その会計情報をどのように利用するか」

が、生涯の研究テーマであったように思われる。先生はこの分野で数多くの研究業績を残されている。主要な著書だけでも、『無効費用の理論』千倉書房 1967 年、『会計的情報と意思決定』中央経済社 1978 年、『原価計算の基礎知識』（津曲直躬と編著）中央経済社 1982 年、『原価会計論』中央経済社 1983 年、『会計学辞典』（森田哲弥と編著）中央経済社 1983 年などがある。中でも『無効費用の理論』は先生の代表作であり、ドイツ会計学を基盤としたコスト・ビヘイビアに関する理論的研究として、日本会計研究学会の最高の荣誉である太田・黒澤賞（1968 年）を受賞されている。

私は大阪大学経済学部の 3 年生として先生のゼミに入り、1984 年に大学院に進み研究指導をいただいた。先生の専門は伝統的な原価計算・管理会計であったが、私の大学院時代には、先生は多変量解析などの統計的手法を用いた経営管理に注目されていた。そのため、経営統計、マーケティングなど、隣接分野との交流にも積極的で、当時の会計学研究者とは一線を画していた。

このように過去の自分の研究にはこだわらない先生であったので、先生が私に与えた修士論文のテーマは、財務諸表分析の実証研究であった。今では実証研究が会計学の主流となっているが、当時、会計学の実証研究者は関西では私を含めて 4 人だけであり、先生の先見の明には今さらながら敬服する。温和な性格の先生であったが、昭和スタイルの研究指導は厳しく、今ならバワハラ発言になりそうなことを言われ、ほぼ泣きながら修士論文を書いたのを覚えている。それが私の研究者としての礎となり、そのおかげで現在の私がある。2012 年に私は名古屋大学から転籍し、大阪大学大学院経済学研究科教授となった。先生のポストを引継いだ嬉しさとともに、その重責が感じられたのを覚えている。

先生との思い出を語れば際限ないが、もう先生はいらっしゃらない。天国でテニスを楽しんでください。心からご冥福をお祈りします。

（山本達司 大阪大学名誉教授・同志社大学教授）